

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	持続可能な利用のための伝統的技術の保存、新たな利用技術の開発
手法名	「森林業」の第三次産業化と人材育成
主体	北海道下川町、NPO法人森の生活
背景 (地域の課題)	かつては森林は、木材(建材、エネルギー)や山菜などの食料を入手するために人間が利用し、水源涵養や治山、生物多様性保全などの公益機能も果たしていたが、近年の社会経済の変化により森林資源の利用は減少し、人と森林の関係も疎遠になってしまった。日本の風土に豊かに生育する森林資源の価値をもう一度見直し、持続可能な地域社会に向けて、森林資源を活用した生業とライフスタイルを、新たな利用法や視点を加えて現代に再生させる必要がある。
手法/方策の詳細	<p>下川町は環境モデル都市として、持続可能な循環型森林経営を実施している。国有林を買い上げ、町有林として地域が利用できる体制を作り、森林を区画に区切って60年サイクルで循環利用する方針で町内森林の施業計画を立案、実施している。</p> <p>計画的な林業施業により、一次産業の林業で通年雇用による移住者が増加した。また二次産業の森林資源の利用では、木材加工にゼロエミッションの考え方を入れ、小径木、中径木等も利用し、木炭生産、樹皮など融雪剤利用、枝葉から精油(エッセンスオイル)抽出、木質エネルギー使用など、建材に限らず多彩な用途で木が使えるよう技術開発と実用化を進めている。</p> <p>現在の課題は、森林の三次産業化であるが、「NPO法人森の生活」のメンバー等の新規移住者が、以下のような方法で森林・林業の三次産業化を試みている。</p> <p>①「癒しの森」の機能の活用 森での「癒し」を味わうための体験活動や精油を使ったマッサージなどのプログラムメニューを創設し、都市住民が気軽に参加できるしあわせを作っ、外部からの交流人口を増やし、経済につなげる。</p> <p>②森林環境教育の場としての活用 下川町と連携し、地域の子もや若者を対象とした森林環境教育プログラムを提供する。3歳児を対象に、月1回森に行き、森で遊ぶくみづくりや、小中高校を対象に、年1回以上、森で遊び保全活動を行う。幼少から高校生になるまで、成長に合わせて体系つけた森林環境教育プログラムを構築し、森林環境教育を地域にねづかせるとともに、将来地域を担う世代に、森林の大切さ、必要性、活用方法等を身につけてもらう。</p> <p>NPO側は、森林ツーリズムとして経済化。外部からの修学旅行生を地元高校生が指導するなどの体制をつくり、将来的には地域で育つ子どもが、地域で働ける仕組みをつくる。</p>
手法・技術的視点	森林を活用した外部者対象のツーリズム事業を起こしていくのと併行して、地元の子もたちへの環境教育を実施して、将来のツーリズム事業を担う人材を養成することが大切。
	<p>「食」に関しては地元飲食店と連携</p> <p>役場、クラスター推進部、商工会と連携</p> <p>体験事業 ・間伐・枝打ち等 ・精油づくり ・森林セルフケア ・森林環境教育</p> <p>「体験の森」指定管理者</p> <p>「しもかわ森林療法協議会」運営</p> <p>農的事業 ・「食べられる庭」</p> <p>宿泊事業 ・「森のなかヨックル」指定管理者</p> <p>製造販売事業 ・トドマツ精油等の「フブの森」シリーズ ・アロマ・ハーブ ・地元特産品</p> <p>森林組合と連携</p> <p>精油づくり、宿泊、地元のスローフードが一体となった「森のアロマツアー」</p> <p>NPO法人森の生活 複合的事業展開図</p> <p>スタッフ 2名</p> <p>スタッフ 1名</p> <p>スタッフ 3名</p> <p>役員 1名</p> <p>長期研修生 1名</p>
参考資料	里なび研修会in北海道 奈須憲一郎 NPO法人森の生活代表